

なめらかでないしぐさ

三河地震の震源

三河地震の震害

三河地震の震害

1945(昭和20)年1月13日午前3時38分に発生した三河地震は、マグニチュード6.8、総死者数2,000名を超える甚大な被害を出し、そのうちおよそ半数は旧幡豆郡(現西尾市)で亡くなっている。その一月前に発生した東南海地震と併せて住家・非住家全壊は5万棟にのぼり、当地の軍需生産にも大きく影響した。太平洋戦争の劣勢が明らかな時期にあって、被害の報道は厳しく統制され、地震に関する調査資料もまた国民の戦意を削がぬよう極秘とされた。二つの地震が「隠された地震」と呼ばれる所以である¹。

三河地震は内陸直下の深溝活断層と横須賀断層上に起きた。地表に現れた断層のズレの一部は、西尾市に隣接する額田郡幸田町（こづ た ちやう）に天然記念物として現在も保存されており、変位柱を目印に、人間に可読な形式へと翻訳されている²。私はそれを眺めながら、恐ろしい力で大地がズレる音を想像し、それからふいに、2億年以上前に形成された石灰岩を溶かしてその音を聞くという大和田俊の作品を思い出した。

三河地震の震害

三河地震の震害

三河地震の震害

2023年8月、旧上田家具店で岡本健児と合流する。岡本はかつて、自分で育てた綿を使って手づくりの画布を拵え、やはり自ら採集した石を砕いた顔料で絵を描くというシリーズを発表している。その時から私は、亜麻布や綿布を木枠に張るのがいつの間にか正統的（ノーマル）なやり方になった絵画というものを、岡本と一緒に最初から辿り直したいと考えていた。

西尾市は綿と縁が深い。799(延暦18)年7月、参河国に小船で漂着した天竺人の青年が、綿の種を持ち込んだ。正確な漂着地は分らないが、古代には海辺の集落だった旧幡豆郡天竹村が、その名を天竺に由来するからと、いつしか綿伝来の地として知られるようになった³。この綿種はすぐさま温暖な南海道諸国及び北海道諸国

副田一穂

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

で栽培が試みられたものの、結局は根付かず絶えた⁴。だからこのエピソードは、近世以降に西三河が一大綿作地となったこととは直接の関係を持たない。

国際芸術祭「あいち2022」で潘逸舟が発表した作品は、西尾市で1918(大正7)年に創業した林帯芯工場を取材したものだった。年代物だが未だ現役の自動織機がずらりと並ぶ古い工場の梁や窓枠に、降り積もった綿埃や糸くずが、何かの拍子にふわりと宙を舞いあてもなく漂う。潘が描き出す工場の光景と、岡本の綿にまつわる手仕事は、古代と近世の二つの綿をめぐるエピソードを架橋してくれるんじゃないだろうか。

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

2023年2月、道の駅「にしお岡ノ山」からほど近い八ツ面山の展望台に、柄澤健介と登る。北に矢作川を、南に矢作古川を臨むこの施設から、西三河綿作の中心地だった広大な沖積平野を眺めた。その地質学的なスケールの印象に反して、二つの川が袂を分かったのは近世、徳川家康が水害対策を命じた慶長年間のことだった⁵。ほどなく元来の矢作川流路だった弓取川が閉塞され、おおよそ現在の流路が固定された。

趣味の登山を通じて撫でるように山々のかたちを把握し、その感覚を彫刻に表してきた柄澤を、地形を俯角で一挙に把握するための展望台に連れていくのはどうなんだ、と冗談っぽく自問する一方で、柄澤ならきっと人為的に付け替えたり消されたりした川を、山の内側や滔々と流れる河の床といった現実には取り得ない視点から捉えられるだろうとも思った。

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

1891(明治24)年、西尾藩御用達の鍋屋・九代辻利八が西尾山康全寺の境内に私

立西尾幼稚園を設立する⁶。前後は不明だが、瓦に「學」の字を刻んだ西尾郷学校の玄関も同じ場所に移築された。利八はまた、明治維新後に破却の憂き目に遭っていた西尾城を惜しみ、東之丸の払い下げ用地を得て別邸とし、1901(明治34)年、歌人でもあった妻・教子と義母で七代利八の妻・多豆子のための茶室・不言庵を設けた(のちに米穀商の大黒屋・岩崎明三郎が用地を引き取り尚古荘と改めた)⁷。他方、肥料商の岩瀬弥助は、私財を投じて収集した古典籍を不朽に伝えようと、1908(明治41)年、西尾に私立図書館を開設した。

近代日本のこうした教育施設の整備や文化財保護の裏に、なめらかにはいかなかった摩擦の跡を探す。風紀を乱し文明開化の妨げになるとして各地で禁止された盆踊りのかつての熱気を、大東忍は夜な夜な会場周辺で独り踊りながら手繰り寄せていた。高橋由一が油絵具と取っ組み合いながらそこに実在させようとした鮭を、礼本彩子はまるで屏風から虎を追い立てるように分厚い立体に起こすことで、その歴史を欠いた卑近な平板さをかえて際立たせる。あるいはまた、守り伝えられたものを別様に見てみよう。膨大な語りを内包する古典籍に囲まれた場所で、物語ること自体を機械に手渡してしまう時里充や、物語を消し去って、寡黙な器としての書物そのものの声を聞こうとする山口麻加のような仕草で。にしお本まつりに合わせて年に一度だけ公開される旧書庫の上階からは、神農理恵が鉄板で組み立てた犬を、庭の斜面に煌めく別の作品と同じように、上から眺めることができる。

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

1945年1月の三河地震の地響きを、西尾高等女学校卒業後に東京へ出た宮崎のり子が聞くことはなかった。翌2月、「まだ学生服を着たままで／純潔だけを凍結し

たような⁸」若い詩人・尹東柱が、福岡刑務所で獄死する。そして、かつて軍国少女を自認した宮崎は、戦後民主主義の只中に茨木のり子の名で文壇に躍り出る。1976年、50歳でハングルを学び始めて尹の存在を知った茨木は、「『君の入ってきかたが遅かった』と／尹東柱にやさしく詰られる⁹」ように感じていた。そんな茨木を、キ・スルギは合成写真やモノマネ、持ち物の再現とさまざまな手段を用いて降霊術のように呼び寄せては、過去へと投錨していく。何かと何かがズレていること。何か何かに隠されていること。それが必然的にそうなっていたのだとしても、どこもない手つきで繋ぎ合わせたり、並べ替えてみたりしなければ分からないことが、きっとあるはずだから。

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

副田一穂の演劇

^[1] 中央防災会議編『1944東南海・1945三河地震報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会、2007年、173頁。

^[2] この深溝断層から目と鼻の先に、本展でコーヒースタンドを出店したヴィーガンレストランmono logueがある。

^[3] 神尾愛子「付録1:天竹町天竹神社と崑崙人漂着伝承に関する史料について」『新編西尾市史研究』西尾市、2015年、21-26頁。

^[4] 田島公「延暦十八年の崑崙人(天竺人)の参河国漂着と綿種の伝来」『新編西尾市史研究』、8-20頁。

^[5] 鈴木正貴「古代から中世における矢作川下流域の河道変遷」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』22号、2021年、29-44頁。

^[6] 幡豆郡役所編『愛知県幡豆郡誌』名著出版、1973年、386頁。西尾市史編纂委員会編『西尾市史4(近代)』西尾市、1978年、563頁。

^[7] 辻嘉和「鍋屋:西尾藩御用鍋屋辻利八・十三代記」ナベヤ金物店、1995年。

^[8] 茨木のり子「隣国語の森」『寸志』花神社、1990年。

^[9] 同書。